

## 滴一滴

話が続くのかな。そんな心配は杞憂きゆうだった。本紙の紙齢5万号記念行事で先月、約40人の高校生による「大討論会」があった。テーマに分かれての話し合いの場で、

筆者は「生理」のグループをのぞいた▼テーマを決めたのは高校生自身。「生理」は意外にも男子からの希望もあった。体験できないし、周りに聞きづらいからという。保健の授業で学び、男子も知識はある。分からないのは女子の気持ちや接し方だという。「すぐくつらいらしいですね」「どんな言葉を掛けたらいいんですか」▼そんな男子の質問に女子は照れずに応じていた。学校を休まなければならぬほど、つらい人もいる。ただ、体調には個人差がある。女性だからこうだろうと決めつけず、親しい間柄ならコミュニケーションを大切にしておほしい、と▼議論は発展し、生理用品を学校などの公共トイレに備えることの是非にも及んだ。トイレトペーパーと同じように備えてほしい。男女ともに同意する声が上がっていた▼性別などの違いがあるからこそ質問し、お互いに理解したいと話し合う。そんな空間はとても温かかった。こんな対話を学校でも、地域のあちこちでももっと増やしていけたら、社会は変わっていきそうだ▼高校生の皆さんには知ってほしい。あなたたちには社会を変えていく力があることを。

2022・9・13

(C) 山陽新聞社 無断複製・転載を禁じます。